

秋田大学医学部保健学科理学療法学専攻の仲間たちと私

グループC 清水 雪花 しみず せつか

1. 紹介するコミュニティ

秋田大学保健学科理学療法学専攻の仲間

1. コミュニティの紹介

私にとって秋田大学医学部保健学科理学療法学専攻の仲間たちは、もし彼らのことを簡潔に表現するのならば、私の人生における「肥やし」です。私は今1年生ですが、同じ学科を専攻している1年生の仲間は16人で、4年生まで含めても70人に満たないとても少人数のところではあります。したがって同じ学年の仲間との交友はもちろんのこと、先輩とのかかわりもサークル、研究課題の被験体役としての協力なども通してかなり深いものとなっています。

同い年の仲間たちとは日常をたいてい一緒に過ごし、遊びに行ったり、ご飯を食べたり、勉強をしたり、ふざけあったり、困ったときにはお互いに助け合ったりと、おかげさまで私は非常に濃い毎日を過ごせています。これが4年間続くわけですから、私含め16人の絆（きずな）はとても強いものとなるでしょう。

一方で、同い年ではない先輩たちとのかかわりはどうなるのでしょうか。こちらは同学年の仲間とはまた違った接し方が必要になってきます。確かにふざけあったりもしますが、基本的に私と先輩の間には「人生の先輩に対する敬意」が存在します。私のほうが教を乞う立場です。無論、ほかの学科の人もサークルなどを通じて先輩とかかわる機会もあると思います。ただ、わたしの専攻する理学療法学専攻の学生は少人数ということもあって、同じ理学療法学を専攻する専さまざまな先輩と授業以外のところでも交流することができます。（最も多いのが飲み会ですが）

やはり、一緒にいてもそうですがキャンパス内を歩いているだけでも、先輩という生き物はたった数歳しか年が離れていないのにもかかわらず、1年生とはまったく違うものなのだと実感してしまいます。特に3、4年生にもなれば雰囲気からして違います。けっして彼らを見て、「きみ、1年生？」とはなりません。なぜなら、「たった数年」の違いの中に先輩が過ごしてきた日々がつまっているからです。

彼らと過ごす時間が多くあるというのはとても貴重です。数年先のイメージが服を着て具体的にそこら辺を歩いているわけですから、私にとってもいい刺激になります。また、普段一緒に過ごしている1年生の仲間たちは日常生活をより豊かなものにしてくれます。それは何気ない会話であったり、プレゼンなど何かを一緒にやり遂げたりすることにあたりします。

人生において「大学生」である時間はたった4年間しかありません。しかし、一般的にこの「4年間」で、人生で最も多くのものを吸収するといわれています。本年度の日本人女性の平均寿命は86.41歳です。よって、「学生時代」に経験したことはこれから約60年以上も続く人生の根っこの部分を形作っていくことになります。私は冒頭部分で、私の所属するコミュニティである秋田大学医学部保健学科理学療法学専攻の仲間たちを「人生における肥やし」と表現しましたが、それはこのような理由からです。

2. 取材散歩に行ってみて

行った場所 : 秋田大学の本道キャンパス医学部保健学科棟

ここは私が普段講義や実習その他をやっているところなので、行っても正直大した感慨はありませんでしたが、ほかの人たちは皆手形キャンパスで授業を受けているため医学部のある本道キャンパスのほうには来たことがなく、施設を案内しながら不思議な気分になりました。案内したのは医学部でも保健学科棟で、大講義室や物理療法室、基礎臨床室、運動療法室などを実際に見せながら、何人まで入れる教室であるか、どんなことをする部屋なのか、設置してある器具はどういった用途でどういう風に使うのかなどを説明しました。私自身まだ1年生なので、機械や器具の使用法や肉体への効果などの説明ではわからないことも多く、自分の知識不足を痛感し、これからもっと頑張ろうという気持ちを持つことができました。

3. 話し合い相手について

話し合い相手 : 進藤教授

これからどんなふうに生きていきたいか、という私には目標があります。目標、とはいっても、ごく最近できたものですが、先日この授業の一環で同じコミュニティの人と話し合う機会がありました。そのとき、私が話し合い相手に選んだのは私たち理学療法学専攻の学生を束ねる、進藤先生という教授です。進藤先生は秋田大学に初めて理学療法学科が設立された当時からいて、規則も仕組みもすべて自分たちで考え、作り上げてきました。

彼は中学校卒業後15歳で当時としてはエリート国鉄（日本国有鉄道）に就職しました。仕事が終わると毎日のように趣味の映画を見に行ったり、仲間と飲みに行ったりと遊んでばかりだったそうです。ある日、彼は一本の映画に出会ったことによって現在の障害者とかかわる仕事に就くことになりました。上記のように当時は国鉄で働くというのはいわゆる「勝ち組」で、一本の映画が彼に、「負け組」である障害者に何かしらのフィードバックをしていくことを決意させたのです。それから彼は勉強し、障害のある人たちのケア

を主に行う理学療法の専門学校に入学して今に至ります。

4. 話し合い結果

先生にとって人生はおよそ3部にわかれており、若いときは「遊び」、存分に遊びまわった次に「奉仕」し、それをやりつくした後は「祈り」の時代に入っていきそうです。今はまさに「奉仕」の最中です。ある **evidence** を「つくる」のが科学者、「使う」のが臨床家、そして「伝える」のが教育者、つまり教授です。日本で理学療法という分野があることを一部の人以上誰も知らない時代から実に30年以上、より多くの理学療法士養成を目標にこれまで知識やあるべき理学療法士の姿として一つの例を体で示してきました。定年までのあと数年間、さらにどうしていききたいかという質問に、「やりたいことは全部やった。あとは成り行きに任せる」という答えをもらいました。

5. コミュニティと私のこれから

「やりたいことは全部やった。あとは成り行きに任せる」

どうでしょうか、この言葉。まさに人生の最期の遺す言葉の究極形「わが人生に一片の悔いなし」への道を踏み出そうとしています。ここまでいうことができる人がいる、つまりこのような状態を作り出した人物が実際に身近なところにいるのです。それだけで、このコミュニティは私にとって価値があります。私もぜひこの言葉をいうことができるよう、仲間たち、先輩たちと過ごす時間を冒頭で述べた「人生の肥やし」になるよう大切にしていきたいと思います。また、逆に私自身も仲間たちの「肥やし」になれるよう、とりあえず何事も一生懸命に取り組んでいきたいと思います。

では具体的に、コミュニティをよくするためにはどんなことをすればいいのでしょうか。私は次の2点を心掛けたいと思います。まず「好ましい気もちで相手と接する」ことです。相手のことを思いやりたり相手に感謝するという気持ちをわすれなければ、自然とそれら内面の思いは自分の表情や言動などに表れ、相手にいい感じ・好感を与えます。その結果、よりよい人間関係に私も貢献していることとなります。

二つ目は、「何のためのコミュニティなのか」を意識することです。それぞれ最終的な目標は違うわけですが、今のところ目指すものは同じです。同じころざしを持った仲間たちがお互いに刺激しあって、絆を深めあっていくというのはとても素敵だと想うのです。もちろん競争意識は持ちますが、お互いに高めあえて、かつ居心地もよいコミュニティを目指していきます。

6. コミュニティ、コミュニケーションとは

コミュニティ：同じ目的をもったひとが集まる空間、組織

コミュニケーション：あるコミュニティの中でお互いがつながりを持ったり、考えを伝え合うための手段またはお互いのつながり、考え自体のこと

7. クラスの感想

なかなかない機会でした。「仲間」たちはふだん一緒に過ごす人たちのことだし、「教授」とは講義などで顔をあわせるものの、じっくり話し合うということはない存在でした。

それが今回のクラスで、「コミュニティ」という言葉を意識してあらためてそれらの存在について考えてみたり、話し合いをしてみたりしたらより理解が深まった気がします。どんな目的をもって仲間に接しているのか、そんな影響を仲間から受けているのか、また逆に私は仲間にどんな影響を与えられるのかということ、初めて意識しました。話し合いの後、私の話し合い相手である進藤教授も、「こんなことを学生にここまでたくさん語ったのは初めてだ」と苦笑していました。

私もこの授業であらためて発見し得たことをしっかりと頭に入れて、仲間や教授の教えなどを自分のための「肥やし」にして、自分もまた立派な「肥やし」になりたいと思います。